

## 西洋古代哲学史 第1回 (2018.04.10. 火), 第2回 (2018.04.12. 木)

1 「今まで、何語を学びましたか、または、学ぼうとしていますか」に対する回答は、以下の通り。

5 フランス語 (3名), 英語 (11名), ドイツ語 (7名), 中国語 (2名), (古代) ギリシア語 (4名), ラテン語 (4名), サンスクリット (2名), ヘブライ語 (1名)

全体で 11 名からの回答で、一人で複数回答しています。

この授業では、西洋古典語 (ギリシア語・ラテン語) と西洋近代語 (イタリア語, フランス語, ドイツ語, 英語など) の文献に言及することが多くなるかもしれませんが, 原則として, 原典とその日本語訳を併記して示しますので, 原典の部分を読めなくても心配はいりません。安心して  
10 下さい。

## 2 質問・要望等

Q.0 レポートはどのようなものを課す予定でしょうか。

A.0 指定した文献 (の一部, 量は多くありません) (授業用の Web サイトにもあげます) を読んで, それを論評する (批判する) レポートを書くか, 各自が講義内容に関係するテーマを自分で設定して, レポートを書いてもらいます。詳細は, 近いうちに, 指示します。  
15

→ 授業用 Web サイト 各講義・共通のファイルを参照。今学期用は準備中なので昨年度のものを見て下さい。(2017 年度の「哲学の世界」「西洋哲学入門」の受講者には既知のものです)

C\_7 「句読点に苦闘!?!」(『生協だより』103号 [2006.04.25] より) : pdf ファイル

C\_8 『レポート作成上の注意』(広島大学): pdf ファイル

20 C\_9 「引用の作法について」(高橋祥吾氏作成): pdf ファイル

Q.1 授業の冒頭で, 以前は古代哲学史を 1 年かけてやっていたとおっしゃっていましたが, なぜなくなってしまったのでしょうか。学生の立場としては時間をかけてみっちり教えていただいた方がありがたいです...

A.1 私が, 学生としていた大学では, 4 単位, 1 年間の授業がありました, 内容は, 2~  
25 3 年で, 西欧古代哲学史をカバーしていたので, 単位だけ欲しい学生は, 1 年間だけ授業を受けて単位をとり, 単位とは関係なく, 授業内容が知りたい学生は, 受講登録せずに (登録できないし), 他の年度も授業を聴いていました。私が, ここで授業を始めた当初は, 6~7 年サイクルで古代哲学史全体をカバーする授業をやっていたので, 受講登録して, 単位をとるのは 1 年間 4 単位だけですが, 古代哲学史全体を聴こうと思えば, 学部の 2, 3, 4 年だけでは足りず, 大  
30 学院に入ってから聴く (でも単位にはならない) ということになります。確かに, 単位とは関係なく聴きに來る学生が何人かいました。

しかし, 大学は, そして, 文科省は, まず, 1 年間通年の授業をやめて, 学問の内容を無視して, 半年で完結する semester 制を導入させ, さらに, その半分 (つまり, 1 年を 4 つに分ける) クォーター制 (これを, ここでは, タームと言っている) を導入して, 外見だけの変更を改革と  
35 称しているわけです。内容がわからない連中には, 目に見える変更をしないと, 改革した, とわからないからでしょう。それよりも, 外国語の習得すべき単位の減少, 特に, 英語以外の外国語の単位が減らされていることのほうが, 文学部の学生にとっては深刻なことだと思います。

Q.2 古代 I の年表にピタゴラスではなく, ピュタゴラスと書いていますが, これは訳した言語の差ですか。

40 A.2 そうですね。ギリシア語をローマナイズすると, Pythagoras (ピュタゴラース, ピュタゴラス) ですが, これが近代語になると, Pitagora (イタリア語), Pythagore (フランス語), Pythagoras

(英語)、それぞれの発音と、ドイツ語は、各自、調べておいて下さい。試験に出ますよ。(まあ、試験はないけど...)

Q.3 西洋哲学の知識がほとんどないので、シェリングなど初めて聞く名前もあり、今後いろいろ知りたいなともいました。

5 Q.3' 今回紹介のあった岩波文庫の本はぜひ読んでみたいと思った。他にも自分で探して読むようにしたい。

A.3,3' 授業で紹介する本を、どれか1冊でも読み始めてもらえばよいと思います。学期内に読み終わられば(読み終わらなくても、読めたところまでに限定して)、レポートに反映できますし、授業が終了しても、自分で読み続けていけばよいのです。

10 Q.4 レジュメの文がすべて左端にそろっていて、読みづらいです。

A.4 同じような感想を以前にもいただいたような気がします。

Q.5 Sopista の需要はなぜあったのだろうか。

今の世の中では実学が尊ばれて、虚学がないがしろにされる傾向があるが、虚学も学ぶようになれば「変な政治家」の考えに異をとらせることができるようになるのであろうか。

15 A.5 法廷弁論や議会での演説が、ものごとを決める力をもつ、アテナイの社会では、特に、国事にかかわる有力な家系の子弟に、弁論の術を教育することが求められたとき、ソフィストが職業的に現われたのでしょうか。日本語訳はありませんが、W. Jaeger, *Paideia* という本の中に、ソフィスト現象についての優れた記述があります。

20 実学と虚学については、言いたいことはなんとなくわかりますが、ここで、虚学と言われているものを、自分から虚学と言わないほうがよいのではないかと思います。

Q.6 ヘラクレイトスがいう、数多くの知識+ $\alpha$ の+ $\alpha$ を目指す人はいたのだろうか？

A.6 + $\alpha$ という言い方はしていなくても、ギリシア語で、*sophia* (ソ피아) と言えば、それが含まれているので、*sophia* を得ようとした人たちはみなそれにあたると思います。

25 Q.7 戦時中の日本の大学では、物理学や化学といった、軍事技術に関連する学問が優先され、哲学などの学問は軽んじられたのでしょうか。

30 A.7 そのようです。物理学や化学に加えて、生物学、医学も優先されました(それも、明治政府以来、理学よりも工学重視の傾向があります)。それがよく分かるのが、昭和になって作られた、阪大と名大は、当初、理工学部と医学部だけという理系の帝国大学でした。学徒動員も文系の学生から戦場に送られたわけですし、実現はしませんが、文系の学部の多い、私学は、慶応と早稲田だけにしてしまうということも考えられていました。

Q.8 哲学者として名づけられるのは、その同時代の人々でも、自分でもなく、後世の人々が決めるものであると考えました。

35 A.8 たしかに。例えば、本人は哲学をやっているつもりだったろう、ルクレティウスは、エピクロスの子孫論を伝える重要な資料となっている詩を残しましたが、本人は哲学者のつもりでも、現在では、詩人とみなされています。

Q.9 ベッカー版とイェーガー版(?)で語順が少し変わっている箇所があることに気づいたのですが、これによって、伝えようとするニュアンスが多少変わってくることはないのですか？

A.9 よく気づきましたね。いい感じです。ニュアンスが違うこともありますし、時には、意味が変わってくることもあります。

40 Q.10 哲学はあらゆる学問の総称ということでしょうか？数学者として今分類される人も哲学者と呼ばれていたのでしょうか。

A.10 哲学(ピロソ피아)が、あらゆる学問の総称である、というのは、その通りです。ですから、その場合、例えば、現在では、数学者とされる、テアイトスと人物が、哲学者(ピロソ

ポス)と言われるのは、ほとんど、学者、というような意味でしょう。

Q. 11 マルクスについては、唯物史観のイメージが強かったため、元々、哲学をしていたことを知らなかった。しかし、その思想には、善いものとは何か、といったことを求める姿がうかがえるので、確かにうなづけると思った。

- 5 A. 11 授業では、社会学のウェーバーも出身は哲学だというようなことを言いましたが、ちょっと文脈は異なりますが、次のようなことを思い出します。なぜそうなのか、考えてみて下さい。

倫理学を担当する教員は哲学出身であるという事例は、いくつでも思いつくが、その逆、つまり、倫理出身の教員が哲学を担当している、という例は、思いつかない、ということである。例えば、東北大学の倫理を担当する戸島君は、京大(院)の哲学出身、京大の倫理を担当する水谷先生は、学部は哲学、大学院は倫理出身、古いが、最終的に京大の倫理を担当した天野貞祐先生は哲学出身、同じく、最終的には近世哲学史担当になったが、その前に、倫理学担当だった西谷啓治先生も京大の哲学出身、京大の倫理担当の森口美都男先生も京大の哲学出身、京大の倫理担当の西谷裕作先生も京大の哲学出身、名大の哲学専攻の中で倫理学分野担当の藤野渉先生も京大の哲学出身、阪大の倫理を担当した相原信作先生も京大の哲学出身、京大の倫理を担当し、後に東大の倫理を担当した和辻哲郎先生は、東大の哲学出身、東大の倫理を担当した金子武蔵先生も哲学出身というような例は調べなくてもすぐに思いつく。(某冊子からの自分の文の引用)

Q. 12 ARISTOTELIS OPERA で始めてギリシャ語を見て、表記等が他と違いすぎてびっくりしました。

- 20 A. 12 ギリシア語くらいでびっくりしていないで、サンスクリットやチベット語の書物、それに、横書きだけれども、右から左へ書く、アラブ(アラビア)語やヘブル(ヘブライ)語、また、縦書きだけれども、日本語や中国語と違って、行が左から右へ移る、(本来の)モンゴル語など、見てびっくりしてください。

Q. 13 人間の問題を扱う時も、自然をベースに考えるべき、考えることが必要でしょうか？

- 25 A. 13 これは、「自然」とは何か、ということも同時に考えなければならないので、重要な問題です。例えば、アリストテレスも、この問題に言及しています。しかし、初期アリストテレスと後期アリストテレスで、少し、言っていることが違っているのですが、私には、初期アリストテレスの立場に惹かれます。初期アリストテレスでは、「自然」についての研究に基づいて、「人間の問題」も扱うべきである、ということになります。後期アリストテレスでは、「自然」についての研究と、「人間の問題」とは、区別されるころまではよいのですが、分断されたまま、という印象を受けます。とはいっても、初期アリストテレスでは、「自然」についての研究に、どのように基づいて、「人間の問題」も扱うべきであるかの、「どのように」ということが明言されていないので、そこが問題であると同時に、我々が自分でそれを考える余地があると言えます。(これについては、昨年、某学会で発表しました)

Q. 14 赤井先生は何語を勉強してこられたのですか。

- 35 A. 14 哲学をやるには、英独仏希羅の5つは読める必要がありますが、思い出してみると、高1までは、英語だけでしたが、高2で、フランス語、ドイツ語、ラテン語、一浪したときに、ギリシア語、ロシア語、大学に入ってから、あらためて、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシア語、ロシア語、サンスクリット、それに英語も、授業を受け、3年のとき、イタリア語、大学院に入ってから、アラブ(アラビア)語、ヘブル(ヘブライ)語かなあ... スペイン語はちゃんと授業を受けていないので、正確に読むには、近代語の中で、ロシア語とならんで、一番時間がかかります(文法書と辞書でチェックするので)。学部生のころのことは、下記を読んで下さい。

→ 授業用 Web サイト 各講義・共通のファイルを参照。

C\_5「哲学と出会えるまで」(『人文学へのいざない』初版より) : pdf ファイル

C\_6「学部生の頃」(『人文学へのいざない』第2版より) : pdf ファイル

## 西洋古代哲学史 第3回 (2018.04.17. 火)

Q. 0 最近、数学と哲学の関係に興味があるのですが、「数(学)と認識」、「数(学)と存在」について何か述べた哲学者や著作をおしえていただければありがたいです。

5 数学の哲学でいうと、プラトン主義という言葉をよく目にするのですが、当のプラトン本人が数学の実在論について語っているものを知りたいです。

A. 0 数学者で哲学者でもあった、Bolzano の *Wissenschaftslehre*, 4巻とか、Husserl の *Philosophie der Arithmetik* などを思い浮かべますが、どの分野でもよいのですが、実際に、自分でも、数学をやったほうがよいです。東広島へ来る前に、J. Cavailles を読むのに、点集合論やルベーグ積分の導入部分などを勉強せざるをえませんでした。ブルバキ『数学史』は、日本語訳で読めますし、詳細な文献表(欧文)がついています。

哲学の側からは、P. Maddy, 1990, *Realism in Mathematics*, Oxford: Clarendon Press がよいかもしれません。ただ、きちんとフォローして読むには、H. Putnam の論文集 (*Philosophical Papers 1: Mathematics, Matter and Method; Philosophical Papers 2: Mind, Language and Reality; Philosophical Papers 3: Realism and Reason*) を参照する必要があるでしょう。

15 話題を探すためなら、Ph. J. Davis & R. Hersh, 1981, *The Mathematical Experience*, Boston: Houghton Mifflin. という本があります。

論理主義(logicism)の立場から書かれています。杉原丈夫「数学及び他の諸科学との関係」(人文書院版、田中美知太郎編集『講座 哲学大系 第三巻 科学理論と自然哲学』, 1963, pp. 244-275)も、参考になります。

20 後半の、数学の哲学でいう「プラトン主義」という表現は、プラトンとは関係ないと思ったほうがよいでしょう。アナロジーで言われているだけで、プラトンとプラトン学徒にとっては、迷惑な話です(しかし、もう定着しているので、仕方ありません)。たとえば、『国家』6巻, 20-21章(509C-511E)の「線分の比喩」を読めばわかるでしょう。

Q. 1 文献として残されている最古の物語(事実でない作り話)はギリシアの悲劇なのでしょうか。

A. 1 個人の作者によるものという意味ではそうなるでしょう(古代ギリシアでは)。インドや他の地域のことも勘案すれば変わってくるでしょうが。

Q. 2 戦時中の大学での学問のあつかいから考えましたが、哲学は今日の私達の生活において価値がなさそうに見えますが、古代や中世のように哲学が活発だったところを見ると、人間である以上、必要である学問であるのに社会や時代にすごく影響を受ける学問だと思いました。

A. 2 長い目で見れば(in the long run)違いますが、短期的にみると、目に見えて役に立ちませんから。しかし、大学に哲学があろうがなかろうが、どこかで行なわれていると思います。むしろ、長い目で見て、世の中の方向に影響を与えるのが哲学だろうと思います。

Q. 3 p. 2, 全体をカバーする授業はよくあるものだし、概説は独学でも可能なので、7年間で「古代哲学」をカバーするようなくわしい授業を私はのぞむ。

「オイディプス王」(ママ、『オイディプス王』)のような"文学"と分類されるものでも哲学という視点でみることもできるのでは、という話が個人的には興味深かった。

A. 3 「のぞむ」とは、力強いお言葉です。私の自己満足な講義にならなければよいのですが...

Q. 4 四原因に気がついたのがアリストテレス、これがすでにアリストテレスの視点であり、違った哲学史のあり方も可能であるというのが興味深かった。様々な人々の様々な視点(を)加えるとより深い学びになりそうだと感じた。

A. 4 アリストテレスに基づきながらも、従来とは違った古代哲学史を叙述する可能性については、Q. 9 と A. 9 も参照。

Q.5 他の哲学の授業で簡単に説明を受けた四原因説の説明をまた受けることができなくて良かった。各言語によって、人物の名前のつづり、読み方、イントネーションがそれぞれ違うことが多くあるようなので、比較表をつくってみたらおもしろいと思った。

A.5 四原因の話ばかりしてすみません。比較表は、ぜひ、自分で作って下さい。人名、地名など、固有名の各国語による表記の違いは、山川の『世界史』（教科書）に、ヒントがあって、高校のとき、すでに、そういうものを作っていました。

Q.6 本来のモンゴル語の縦書きが左から右に書く理由と（ママ、を？）聞いてアラビア語やヘブライ語が右から左に書くのも理由があるのかなと気になりました。

A.6 文字の形態にもよると思います。モンゴル語は、すでに成立していた古いシリア語の影響があるのでしょうが、もっと古くは、「ぎゅうこう」といって、牛が畑を耕すときに、一筆書きのように、右から左へ、そして、左から右へ、また、右から左へ、というように、書かれたものもあるので、横書きの場合、最初は、右から左か、左から右へか、決まっていなかったはずで

Q.7 アリストテレスに対しての知識と情報がすごいなと思いました。

A.7 ひょっとして、もし、私のことを言っているのなら、私などは、ほとんどアリストテレスのことを知りません。もっと、よく知っている人が、世の中にはおられます。

Q.8 人間の問題（我とは？ 人間とは？）を第一に考えるべきではないか。人間がいてはじめて、自然、地球が存在する。人間がいなくなれば何も存在しないと考えるゆえに。

A.8 それと同時に、自然や、たとえば、数学もやるべきである、というのが、プラトンやアリストテレスの哲学がカバーする領域なのだと思います。同じ数学の領域をやっている、数学者によって、その人の個性が出てくるといってもあります。また、先に名前を挙げたボルツァーノのように、人間などいなくても、数学の体系は存在する（その場合、誰が数学をやるんだ？ 誰もやらなくても数学は存在する）という極端な立場を検討してみるのも、哲学の仕事です。

Q.9 古代哲学史をアリストテレス以外の観点から見ようとしたケースはあるのでしょうか。

A.9 たとえば、昨年度のレポートの課題のひとつに指定した、

A\_1 「問答と探究としての哲学史」：pdf ファイル

に、タレースから始まらない、古代ギリシア哲学史の叙述の可能性を指摘しておきました。

## 古代哲学史 第4回 (2018.04.24. 木)

Q.0 数学の哲学に関連する文献をいろいろ紹介してくださってありがとうございます。自分は数学の分野では数学基礎論に興味があり、この分野について学習したいと考えているのですが、基礎的な知識が欠けているので、今は数学科に混じって線形と解析の講義を受けています。これ

5 からも吸う鵜学の哲学をもっと深く学んでいきたいと考えているので、また何か質問するかもしれません。

A.0 まあ、がんばってください。ご存知のように、私は、西洋古代・中世哲学史担当ですので、数学基礎論は、現代の問題ですから、現代哲学担当の先生の意見も聞いてみて下さい。

私も、大学1～2年のころは、文系向けの解析と線形代数などの講義を受けていましたが、これ

10 れではあかんと思い、理系向けの（しかし、理学部向けのは、こわかったので、ちょっとひよって、農学部向けの）解析の「講義および演習」というのを受けていました。文系向けの「講義」は2単位なのに、理系向けの「講義および演習」は、問題を解かされてしんどいのに、1.5単位にしかならなかったのを覚えています。

基礎論と言えば、

15 竹内外史・八杉満利子、2010、『復刊 証明論入門』、共立出版社、pp. 168–181.

に、『科学基礎論研究』39号、1972、Vol. 10、No. 4から転載された「最近の話題」（当時の最近ですから、1970年代のこと）という章があり、哲学と数学、それに、それぞれをやっている人たちの関係が語られていておもしろいです。この本の初版は、1956年で、もとの書名は『数学基礎論』だったはずで

20 さきの「線形と解析の講義」のうちの「線形」は、たぶん、「線形代数」ではないかと想像しますが、「線形(linear)」と「竹内外史」さんといえば、「線形論理」を思い浮かべるかもしれません（え？ 思い浮かべない？ 「線形論理」なんて習ってない？）。これは、たしか、1980年代に、ジラール（竹内外史さんは、ジラー と表記する）Jean-Yves Girardによって提出されて、いわゆる情報科学でポピュラーになっている論理です。これをわかりやすい日本語で、いちはやく紹介したのも、

25

竹内外史、1995、『線形論理入門』、日本評論社。

です。この時期（1990年代）には、日本の哲学の学会でも、「線形論理」の紹介とその哲学的な意味付けを試みる研究が発表されていたりしましたが、いまは、情報科学のほうへいってしまっただけでしょうか。ご存知でしたら、教えて下さい。

30 Q.1 プラトンの「線分」を使った、悟性、思惟、知性の把握の仕方が一番おもしろかった。赤井先生が知りうる限りの雨の日の楽しみを教えてくださいませんか。

A.1 雨の日は苦手で、何をしたらよいか、これとって思いつきません。ショパンでも聴きますか（でも、ショパンも苦手です）。それなら、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ第1番ト長調作品78「雨の歌」の、それも、作曲者自身による、二長調のチェロ編曲版を聴くのはいかがですか。室内楽の場合は、聴くよりも、自分で弾けたらもっとよいですが...

35

Q.2 プラトン関連の本を持っているので改めて読み直しておきたいと思った。

A.2 その際に、授業関係のWeb上にある、次のC\_2ヤスパース「哲学・哲学史について」で言われていることを少しでも実行してみてください。

C\_2ヤスパース「哲学・哲学史について」（『哲学入門』より）：pdfファイル

40 Q.3 先生は家（実家でもいいです）でペットを飼っていますか。最近、友達の子猫を見て思いましたが、哲学者とペットの話は聞いたことがないと気づきました。

A.3 家でも実家でも飼っていません。ショーペンハウアーの伝記を読むと、犬をショーペンハウアーは飼っていたようですし、フォーコーだったか、猫を抱いている写真を見たことがあるよ

うな・・・それに、もう退職されましたが、以前、総合科学部におられた、高橋憲雄先生は、大学の研究室にまで猫を連れて来ていました。

Q.4 人間がいなくても数学の体系は存在するという考えを聞き、誰もいない森の中で貴が倒れたら音はするのか、という問いを思い出した。自分は人間がいなければ哲学は存在しないのではないかと考えていますが赤井先生はどう考えますか。また、哲学は存在しないとしても命題は存在しているのか、哲学がそもそもないのだから命題もないのだろうかといろいろな考えが浮かぶ。

A.4 Q.6とも関連しますが、人間がいなくては話が始まらないというのは、ある意味で当然なので、むしろ、それとは対極にある主張を検討してみることで、単に無意味だ、として片付けてしまったのでは、わからない、問題の所在がよりあきらかになるのではないかと、思っています。

Q.5 (感想) 単位、卒業のために講義を受けるのではなく、純粋に学びたいから講義に参加する、そうした姿勢が大切なことを最近身にしみて実感しています。何かのためにするのと、純粋に楽しいからしているのでは一緒の時間を過ごすのでも全然違うなと思いました。

A.5 たしかに、単位が必要で受講した授業よりも、もう単位は要らないけれども、内容に惹かれて受講した授業のほうが身についたというか、長い目みるとためになったと思います。

Q.6 人間などいなくても、数学の体系は存在する(ボルツァーノ)。しかし、人間がいなくても何が在っても認識(確認)出来ないのでも存在しないと(同じこと)言えないか？

A.6 たぶん、ボルツァーノからすれば、命題自体は、人間が認識しようがしまいが、それと関係なく存在するのであって、人間に認識されないと存在しないのと同じことであるというのは、人間にとって存在しないのと同じこと、という意味であり、それを人間がいなくても主張するのは、人間の傲慢だということではないでしょうか。

Q.7 私たちが普段見て、触れているのは物の影と物そのもので、実体に触れているわけではないということを学びました。本に書かれる言葉さえも影であると言われては、文学部としてはちょっときまりが悪いものがあります。

A.7 プラトンの場合については、生きたことばと、その影としての書かれたことばを峻別する、プラトン自身の態度を理解した上で、私たちとしては、影である書かれたことばから、プラトンの真意を読み取らなければならないというむづかしい状況にあります。ですから、なお一層の厳しい文献学的訓練が私たちには必要なわけです。

プラトンの対話篇の意味については、

Szlezák, Th. A., 1993, *Platon lesen*, Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann-Holzboog.

という優れた小冊子(といっても、174ページある)があり、日本語訳でも読むことができます(スレザーク(内山勝利他訳)『プラトンを読む』(岩波書店))。

Q.8 プラトンは哲学を学ぶ場合は、数学をやれと言っていたと思うのですが、数学が関連する哲学書が後世も出ているため、哲学書を読むために数学を学ぶことの意義を感じました。

A.8 数学は、教養科目や理学部のものを利用してもらうとして、文学部の「西洋哲学」分野では、「論理学」を集中講義(今年度は、2018.08.13~17.)を用意していますから、学ぶ機会として、これも利用して下さい。

次回は、5月1日(火→木の授業)。曜日の変更に注意。

## 古代哲学史 第5回 (2018.04.26. 木)

Q.0 赤井先生はいつも元気があつてうらやましいです。私は最近、何をするにもあまり元気がでません。本を読む、テレビを見る、映画を見る、映画を見る、勉強するなどの元気があればやろうと思えることが、やれません。

- 5 A.0 元気があるように見れば、それは、から元気です。不正<sup>1</sup>に対する怒りが元気とみえるものの原因かもしれません。

元気とはちょっと違う話ですが、怒りをおぼえることが多いので、そういときは、YouTubeで、タイの泣けるいい話を見ます。何度見ても泣けます。他には、オーケストラのプロローベ(リハーサル)風景のCDとかLP(映像のも少しある)を聴く(見る)と、それに没頭して、他のことを忘れて、いやなことを忘れます。今はやっていませんが、以前、アマチュアのアンサンブルに参加していたときは、本演奏よりも、練習のほうが好きでした(普通とは逆ですね)。

Q.1 他の人のQ&Aや先生が持ってきてくださる資料などを見て、論理学や文献学にも興味が出てきました。

A.1 興味をもったものを自分でも調べてみて下さい。

- 15 Q.2 本当に書きたいものは書かれない、確かにそうなのかもしれないと思いました。ただ字づらをなぞっただけでは書いた人の気づかいは分からない。そこにおもしろさと難しさがあるように感じました。

A.2 文字による文献ではありませんが、(西洋音楽の、私たちが普通に思い浮かべる)楽譜は、作曲家が完成した稿でも、いいたいことの10%しか書かれていない、という考え方もあり、残りの  
20 90%を埋めるのは、演奏家の仕事だということです。書かれているのが、いいたいことの何%とみなすかは、人によって違うでしょうが、文献を読む場合も、同じようなことが言えると思います。

Q.3 本を持っているのに読んでいなかったり、途中であきらめてしまっているというのは、私もありがちなことなので、ちゃんと整理しておきたいと思った。

- A.3 本をものとして所有しているかどうかと、その本を読むべき機が熟しているかどうか、  
25 時期として一致しているとは限らないので、読むべきときがきたな、と思ったら読む、という態度でよいと思います。同じ本でも、高校生のとき読んで受け取る印象と、もっと年をとってから受け取るものは違うでしょうから。

Q.4 古代の哲学者の著作できちんと残っているのはプラトンのものくらいだとありました。先生がこれまで古代哲学を研究してきた中で、もしかしたらこの哲学者はプラトンより優れている  
30 かもしれない、あるいはその著作が完全に残っていたとしたら後世に与えた影響はプラトン以上だったかもしれないという可能性を感じた文献等がありますか。

- A.4 プラトンより優れている、とは言えないかもしれないし、しかし、実際に、後世に与えた影響(悪影響?)は、プラトン以上でしたが、そういうのがあるとすれば、アリストテレスの著作です。というのも、現在残っているアリストテレスの著作集は、実は、著作ではなくて、講義ノートや講義録の類で、アリストテレスが公刊した対話篇(アリストテレスの対話篇! そんなもの、あったんか? あったんですう~!)は、すっかり失われてしまっていて、後代の著作家が部分的に引用してくれたものが断片的に残っているだけだからです。

アテナイに留学し、ギリシア語もよくできた、キケロが、アリストテレスのギリシア語を、「黄金の輝きをもった雄弁の流れを逆らせながら」(flumen orationis aurem fundens: Ross, *Aristotelis Fragmenta Selecta*, p. 89, Cicero, *Lucullus*, 38, 119)とかクインティリアヌスが「力強く甘美なる雄弁」(eloquendi vi ac suavitate: Ross, *op. cit.*, p. 4, Quintilianus, *Institutio Orationis*, 10. 1. 83)と賞賛しているのは、現存する、アリストテレスの著作集のことではなくて、失われた、アリストテレスの対話篇のことであつたろうと思われま

<sup>1</sup>「不正」と自分には思えるが、当の「不正」をしている人は、「不正」とは思っていない。



Q.5 自分が文字になることは楽しかったです。文字である自分が言うことは決まっているのに、読む人によってその意味が変わってしまうことは、文字としては残念だが、人々の間では、議論の範囲を広げるものだと思います。間違いなしには、発展もない、ということかもしれないです。

5 A.5 単に、学力がなく読解力もなくして読み間違っている場合は、ただなさけないだけですが、原著者の真意をわかった上で、意図的に読みかえている場合は、第三者からみると、誤読しているようにみえるけれども、その違った読み方が（よいか、わるいかは別にして）後世に影響を与えることになり、様々な議論を呼び起こす、ということもあります。そういう観点からおもしろいのは、次の本です。

10 山内志朗，2013，『「誤読」の哲学—ドゥルーズ，フーコーから中世哲学へ』，青土社。

Q.6 自分が考えていることを言葉で表現できないという状態は、自分も経験したことがあります。また、自分は漢文で、主人公が自分の思っていることを表現できずに苦悶する話を読んだことがあります。時代、国を問わず、誰しも経験することだと授業を通じて改めて感じました。

15 A.6 Q.6が念頭においているものとは違うかもしれませんが、中島敦の「山月記」のもとになった、李景亮の「人虎伝」を思い出しました。が、ちょっと読み返してみると、特にそういうことは言っていないようなので、私の勝手な思い込みでした。しかし、逆に、李白の「春夜宴桃李園序」の中に、「大塊假我以文章（大塊我に仮すに文章を以てするをや）」つまり「天地が私たちに貸すに文章を作る才能をもってしているからには」（いよいよ愉快地に遊ぶべきである）という  
20 ようなことは、李白ほどの人でないと言えないことではしょうね（この引用だけでは分かりませんが、四六駢儷体ですし、散文なのに対句で詩のようです）。

Q.7 ……難しい本を読んでいると必ず眠ってしまって最後まで読めたためしがありません。先生はギリシア語やラテン語で内容も難しい本を読んでいるらしいですが、どうしたら読むモチベーションが保てますか？ ページ数の多い本など、日本語でも読む前からげんなりしてしまいます。視力が弱いので、なおさら文字数の多い本は辛いです。

25 A.7 「必らず眠れる本がある」とすれば、それはそれでうらやましい気もしますが…しかし、何が書いてあるのだろうか？ とか、なんて言っているのか？ とか、知りたい！ という動機で読んでいますから、そういう関心がない本は、無理に読もうとしても、途中で投げ出してしまいます。自分が関心をもって読もうとしている本ではなくて、授業や課題として与えられた本の場合は、（たまたま、自分でもその本の内容に関心がある場合は別として）先生はどういう意図でこの本を課題にしたのだろうか、とか、この本の内容と授業のテーマはどういう関係があるのだろうか、  
30 とか、その本以外のところに、疑問や関心をもたないと、読む動機がみつかりませんね。

それから、読了すべき期限が決まっている場合は、仕方ありませんが、無理に、一度にたくさん読まなくてもよいのです。人それぞれに、読むスタイルがあると思うので、各人ちがついてよいと思いますが、違う傾向、違う内容の本を2、3冊、時間を区切って、並行して読む、というやり方もあります。いろいろ、試して、自分にあつたやり方を見つけて下さい。  
35

締切前に、作品や論文を完成させる時期に、寝ても覚めてもそれに集中する、ということはありませんが、普段の勉強としては、この、異なる傾向のものを同時期に、並行して読む、ということは、文献を読むということだけではなくて、哲学と哲学史の勉強をする上では、文系的なもの（たとえば、外国語の本を読む）と理系的なもの（論理学や数学の勉強）をバランスをとって並行して行なう、ということでも大切だと思います。一人でやっていると、意志が強くないとできませんが、授業（や他人との勉強会）を利用すれば、いやでも強制的にそれができます。年間を通して、少なくとも、英語、ドイツ語とその他の科目（数学でも、論理学でも）を並行して勉強し続けることが必要です。どれかだけしかやらない、というのでは、魂（精神）の健康によくないので、魂（精神）が栄養失調になってしまいます。

## 古代哲学史 第6回 (2018.05.01. 火→木)

Q.0 向島で大捜索されていた脱走受刑者の人は、移動手段によっては、西条を通過していたかもしれませんね。私は広島まで出ていかずに、西条まであたりで潜伏していたら、もっと逃げられた(ママ、逃げられた)のではないかと思います。

5 現代寿命での盛年は何歳くらいにするのが妥当ですか。

A.0 主観的には、50歳くらいでしょうか。日本に限定すれば、もっと上げるほうがよいかもしれません。

やはり、泳いでいたか、という感じです。昭和19年に、ペリリュー島で日本が全滅する戦いのとき、パラオ本島への伝言の命をうけた兵士達は、増援に来たときには使えた船が使えないので、  
10 なんと、泳いで任務を果たしています。某逃亡犯は、(盗んだ)バイクで竹原へ、それから呉線のほうへ行ってしまったようでしたが、そもそも、人間関係がいやで逃げ出したと言っているそう  
ですから、人間関係ってとても大切なんだと思いました。よぼどいやだったのでしょうかね。光秀  
と信長のことを思い浮かべてしまいました。赤井と某・・・だって・・・おっとあぶない。

まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、**卍!**

15 それと、もうひとつ思ったのは、某逃亡犯は、警察がすでに2回も捜索した、無人の別荘の屋根裏にひそんでいたというので、人間の体温を感知する熱源探知機を天井にかざして探す、ということもなければならなかった、ということです。そういう装置は、警察には配備されていない  
ということなのでしょう。障害物の有無と、感知できる温度差が問題でしょうが、ドローンに搭載して、低空飛行させて、上空から広範囲にわたって探す、ということも考えられるのでは、と  
20 思いました。屋外で、上空から捜索すれば、野生動物や、付近の住民もひっかるでしょうが、屋内で、天井を捜索すれば、よりヒットする確率は高くなると思いますが...

Q.1 昔の「盛年」は、寿命を意味しているのか、最も活動的な寝台を指しているのか。タレスが日蝕を予言し、影響力を増したのを盛年としたが、当時の平均寿命を考えると、40歳はかなり老人なのではないのでしょうか。2つのことを考えるとわからなくなりました。

25 A.1 アクメー (akmē, 盛年) を40歳とするのは、平均寿命とは関係ありません。そもそも、正規分布していないと思われるので、平均が意味をなさないとされます。

Q.2 ソクラテス、プラトンは polis を対象として述べられているが、彼等が、imperium の立場で考えたとしたら物事をどのように答えるだろうか？

30 A.2 現実にはなかったことを想定しなければならないので、むつかしいことですが、ソクラテスの当時、大帝国として存在していたのは、ペルシアの例がありますから、そこでの哲学のあり方を模索することになるでしょう。

Q.3 タレスはアルケーを水と考えたというイメージしかなかったけれど(も)、プシューケー(ママ、プシューケー)についてもいろいろ考えていることが分かり興味を持った。

35 A.3 タレスにとって大切なのは、物質としてのヒュドール(水)よりもむしろ、生命の根源、原理としてのプシューケー(魂)と、ト・テイオン(神的なもの)、テオイ(神々)、テオス(神)のほうなのでしょう。その現実的な、具体的な現れが水だったのでしょう。

Q.4 次の授業はゴールデンウィークの後ですね。先生はゴールデンウィークに普段にはしないことをしましたか。

40 A.4 特にどこにも行きませんし(普段から、京都、神戸、尾道、東広島と用事があって移動していますが)、いつもは、睡眠不足なので寝ていました。ほかには、不気味な色合いのインクを調合しました。いい感じに不気味です。

Q.5 チョコボールのキョロちゃんのストラップを身につけておられましたか、チョコボールが好きなんですか。

YouTube で感動話見てみようと思います。

A. 5 チョコボール自体は特に好きではありません。

5 医師になった少年が、30 年前に自分が子供だったときに受けた親切に対する恩返しをする話がいちばん泣けますが、タイ版の忠犬の話も泣けます。みんなで見て泣きましょう。うえ〜ん、心が洗われます。

Q. 6 プシューケーとアルケー、万物は同一のものと考えればよいのでしょうか。

A. 6 ト・パーン（万物）は、目に見えるものがメインですが、プシューケー（魂）もアルケー（始めのもの、元のもの、根源、原理）は、目に見えず、万物を動かしているものもの、ということ。

10 Q. 7 ヘレニズム文化へと移り変わるとともに、哲学的関心が個人の生き方に変容した点に興味を抱き、もっと詳しく知りたいと思いました。

A. 7 古代哲学史後期というのは、哲学的には、墮落のイメージがあるのですが、20 世紀末には、欧米の研究者も、そして、それに影響を受けて、日本の研究者も、研究する人たちが増えてきました。しかし、それとは関係なく、以前から、ストア派、エピクロス、懐疑派、さらに、いわゆる新プラトン派と言われる、プルピュリオス、プロティノス、プロクロスなどを研究し続けて

15 いる人たちもいます。周囲の研究動向にアンテナをたてて、察知することは必要ですが、それはそれとして、自分はこれをやりたい、というテーマを見つけて下さい。

私は、自分であれこれテキスト読んでいて、気になったものから、アリストテレスの『カテゴリーアイ（範疇論）』の解釈を卒論のテーマに選びました。その後、修論では、当時、それほど取り

20 上げられていなかった（日本では、論文が 1 本しか見つからなかった）アリストテレスのディアレクティケー（問答法）をテーマに選んで論文を書きましたが、指導の先生からは、「なんでこんな裏街道みたいなことをやるの？」と言われました。が、その後、海外でも、少しずつ、アリストテレスのディアレクティケーを扱う研究が出始めました。

Q. 8 授業とは関係なくて申し訳ないのですが、先生は、1 日のうちのどのような時間帯に勉強・研究をなされますか。自分は最近、深夜に勉強するとはかどることがわかり、夜型の生活になりつつあるのですが、授業に影響がでるのでなおしたいです。

25

A. 8 個人ごとに、やり方がちがうと思うので、一概にこうやればよい、というのはないと思います。が、高校から大学入試の期間に、大体、自分の勉強のスタイルができていない

30 プロジェクト？ ごとに（何年か先のことまで考えて）時間配分を考えればよいのですが、具体的に、それも他の人の（知っている、知り合いなどの）例を紹介してみると、例えば、こんな感じ

です（それは、授業で.....）

## 西洋古代哲学史 第7回 (2018.05.08.)

Q.0 ラテン語の文章で、自分の研究していることなどに関連するものは単語の知識があつてスラスラ読め、関連しない者はそうはいかないといった話がありましたが、英語やドイツ語などの近代語のように数千の単語を身につけて操ることができるようにするといったことはラテン語  
5 ではむづかしいことなのでしょうか。

A.0 難しくても可能だとは思いますが、今でも、ラテン語の雑誌が出ていたり、ラジオ放送があつたりしますから、実際、近世初頭までは、使われていたわけですし、しかし、「英語やドイツ語などの近代語のように数千の単語を身につけて操る」というようなことは、英語圏やドイツ語圏で暮らす、というような必要があればやればよいので、何のためにそんなことをするのですか？  
10 私は、高校生のときに、某旅行会社がチャーターした、バス会社(?)のオランダ人の運転手さんが運転するバスで、パリから、フランクフルト・アム・マイン、チューリッヒ、フィレンツェ、ミラノ、ローマまで、何日間か旅行したことがあります。その運転手さんは、行った先々の言葉を(つまり、フランス語、ドイツ語、イタリア語)自由に使っていました。必要があればできるので、何のためにそうするのか、のほうが重要でしょう。

15 Q.1 アナクシメネスがアナクシマンドロスとは違う形で基体の原質について捉えるように、人によって物事の捉え方が変わるので、文献を読むのは難しいなと思いました。

A.1 たしかに、日本語訳してしまった時点で、すでに訳した者の解釈がはいってしまうので、翻訳だけを読む人にとっては、不自由というか、酷な話です。

20 Q.2 文字資料などがほとんど残されていない人物などの思想を語るのは、勝手な解釈ばかりが生まれてしまう怖れがあるので、おもしろさ以上に難しさもあるなと思った。

Q.2' ソクラテス以前の哲学者の言っていることは抽象的かつスケールの大きい話で難しく感じました。彼らの残した文献が(あまり)残っていないというのも、わかりづらい原因かもしれません。ちゃんと復習します。

25 A.2 残されたテキストからは、少なくとも、ここまでは言える、しかし、これ以上のことは、可能性としては、いくつか考えられるが、それはあくまでも可能性である、という見極めが必要で、他の時代のテキストの解釈についても同じことが言えますが、ソクラテス以前の哲学者たちについては、とりわけ、このことがあてはまると思います。

Q.3 宇宙に行けなかった時代に宇宙という広い空間で物事を捉えているのはすごいなと思いました。(ここでいう「宇宙」は一般的な日本語の宇宙ではないのかもしれませんが)

30 A.3 ト・パーン(万有)、ピュシス(自然、実在、原質・・・)など、ギリシア語をどういう日本語に移すか、ということですから、Q.1 & A.1と同じ問題に行き当たります。

Q.4 あまり取り上げられていないことを卒論のテーマにするのは難しいことかもしれませんが、違うことをやってみるのはおもしろそうなので興味を持ちました。

35 A.4 研究動向を知らないと、ある研究テーマが、あまり取り上げられていないかどうか、わかりません。まず、研究論文を読んでみることです。

Q.5 予備レポートの提出はいつですか。

A.5 そろそろ指示します。期間が短いので、未完成でも一旦提出してもらえればけっこうです。

## 西洋古代哲学史 第8回 (2018.05.10.)

Q.1 今日話しておられた哲学者の名前は Richard Burthogge (バーソグ) のようです。

言語というのは人にとっても大きな影響を持っているなと思いました。言語が国民性に影響を与えているのか、国民性が言語に表われているのか、言語の学習もおもしろいなと思いました。

5 A.1 大沼忠弘先生のことばは、言われたそのときには実感できないのですが、自分が勉強していくと、だんだん、なるほど、とわかってくるような、深いことばです。

Burthogge (c. 1638–c. 1703) について、はじめて知ったのは、Cassirer の *Erkenntnisproblem* という4巻本の1冊目のゲーリンクスのところを読んだときでした (E. Cassirer, *Erkenntnisproblem*, Bd. I, S. 543ff.). Burthogge は、イギリス人ですが、ライデンで医学を学び、ゲーリンクスの影響を受けたようです。ロックと同時代の人ですが、全認識の主観性を主張する、ロックの立場を近代的認識論とすると、それを批判した Burthogge は、前近代的な心霊術的形而上学の立場として近世哲学史では取り上げられないようですね (そういう忘れられた哲学者ばかりを集めて、『西洋近世哲学史の裏街道』とか、『もうひとつの近世哲学史』とかいう本にするとか、いっそのこと、科目名として、「裏西洋近世哲学史概説」とかを開講したらどうでしょうか)。Burthogge は何冊か本を書いています。英語のものとしては、*An Essay upon Reason, and the Nature of Spirits*, 1694. があり、Cassirer は、これを註でかなり引用しています (カッシーラーは、ちょっと、英語の綴りを間違っていたりするところがありますが)。

Q.2 ドイツ語は男性的、フランス語は女性的という考えは全く逆である、ということを知り、一年の時にドイツ語の教授がほんの少しオネエっぽかったのを思い出しました。

20 A.2 ドイツ語のパーティクル (小辞) が、よい方向で使われると、濃 (こま) やかな感情を表すことができ、他人の気持ちにまで、心配りができる人になる (というのが、よい意味で、日本の女性的、という言い方を大沼先生はなさったのだと思います)。ところが、これが、その人 (大抵は男) がもともと持っている性格・傾向性を、悪い方向に助長すると、こまかいことに、ねちねちとこだわる、いやな奴になってしまう、という意味です。

25 Q.3 言われてみると、ドイツ語が男性的で、フランス語が女性的なイメージが少しあったのかもしれませんが、ドイツ語フランス語で本を読む機会があれば気にしつつ読んでみたいです。

A.3 是非、両方読む機会をつくって読んで下さい。

Q.4 単語の意味はどんどん変化していくので古代の文献を理解するのは難しいなと思いました。

A.4 なるほど。でも、その変化をさかのぼっていくのが、哲学史の仕事のひとつですね。

30 Q.5 Hesiodos の宇宙論についてなのですが、初め chaos があって、それが収束していく形で Gaia が形成されるのではなくて、Chaos と Gaia は影と光のように、一方がいて他方も成立するような関係だと理解してもいいのですか？

A.5 そんなに整理して理解してはいけません。たぶん、違います。私の説明が十分ではなかったのですが、ヘシオドスの記述は、もっとむちゃくちゃです。

35 Q.6 当時の‘神的なもの’の説明で、それは永遠なものであって変化なく、ずっとつづくものであると言われましたが、インドでは生命が形をもつことをつづいてくりかえすことのように考えることだと聞いたことと比較したら、西洋哲学では人間は限界を持つはずのものだという考えから始めるのかなと思いました。

A.6 ギリシア人が、人間のことを「トゥネートイ (thnētoi), 死すべき者ども」と呼んでいることが、逆に、「テオイ (theoi), 神々」「ト・テイオン (to theion), 神的なもの」との対比を意識していることを表しているので、「テオイ (theoi), 神々」「ト・テイオン (to theion), 神的なもの」は、「不死なるもの」、つまり、「永遠なるもの」と考えられていた、と言えるのです。

Q.7 哲学に関する本は世にたくさんありますが、参考にすべき本を紹介してくれるのはありがたいです。

A. 7 赤井が読んで、いい感じだなあ、と思うものを紹介しているので、それはそれとして、赤井は、いいと言っていないけれども、こっちの方がいいぞ、というのを自分でも見つけてくれるとうれしく思います。

5 Q. 8 おもしろいレポートを書ける自信がないです。数学とか科学に関する理系的なことが苦手で、そういうものについての本は、目がすべて全く書かれていることが頭に入りません。自分が興味を持っていないからでしょうか？ 理系的な本を読んで、わくわくする人間なんてこの世にいない気がします。

10 A. 8 レポートは、おもしろいものを目指す必要はありません。取り組んだテキストや資料に基づいて、これこれのことが言える、というレポートができれば十分です。すでに、赤井の他の授業を受けたことのある人ならば、わかっていることでしょうか、レポートの内容以前に、学問的な評価に耐えるレポート・論文の書式（具体的には、引用の仕方）が整っているかどうかという段階で躓いている人が多いので、その書式を学んでもらうのが、赤井の授業でレポートを課す目的のひとつです。

15 それから、文系とか理系とかいう見方は、学問にとっては、本来ないものであって、これは、日本の大学入試の科目の区分という意味で、日本的な気がします。特に、ギリシア人の哲学（＝学問）にとっては、文系とか理系とかいう見方は、あてはまりません。また、学問として、成立したのが、最近の経済学は、社会科学に分類されて、大きく分けると、文系に入っていますが、近代経済学は、数学なしではやっていけませんから、文系か理系かという見方でいくと、やっていることは、ほとんど理系です。

20 「わくわく」する内容というか対象が何であるか、とうことにもよりますが、集合論の授業を受けたとき（カントールとかデデキントの話）、例の「濃度 (potency, power)」が出てきて、こんもん、どうするんや、と思っていると、「対角線論法 (diagonal process)」で示されたときは、少し「わくわく」したような記憶があります。ルベーク積分を理解するための「測度 (measure)」の概念や、ボヤイ (Bolyai, 息子のほう) やロバチェフスキ (Lobachevsky), リーマン (Riemann) の非ユークリッド幾何は、イメージしにくいところがあつて、理論 (理屈) ではそうなるけれども、という不満が残るのに対して、「対角線論法」は、書き出されると目に見えてわかるので、説得力があると思うのですが...

哲学と論理学の関係では、数式が苦手な人も、ほとんど数式がでこなくて、縦書きの本として読める本がありますから、図書館や書店で手にとって見てみてください。

30 八木沢敬, 2018, 『「論理」を分析する』, 岩波書店。

吉田夏彦, 1977, 『論理と哲学の世界』, 新潮選書。(これは、ちょっと前に、文庫化されたので入手しやすい。)

35 この授業では、レポートとして、何が要求されているのかを考えて確認する必要がありそうですね。それは、授業に出た人には伝えられるけれども、この文字化された Q. & A. を後から読むだけの人にはわからないことだとしたら、プラトンの対話篇を読んだだけでは、プラトンが直接弟子たちに伝えていたはずのことはわからない、というのと同じ関係にあるかもしれません。

## 西洋古代哲学史 第9回 (2018.05.15.)

Q.1 書くことが思いつきませんでした。

A.1 書くことを思いつかないような授業をして申し訳ありません。

Q.2 最近、朝に早起きすることが大変です。先生は先生なりの早起きのコツがありますか。

5 A.2 特にありませんが、早く寝ることでしょう。が、早く寝るには、その日も早く起きて、体を動かして運動しており、ある程度、体が疲れていると早く寝ることができますが、なかなかそうはいきません。何日かかけて少しずつずらしていいくことでしょうか。

Q.3 最後に人間が神をつくった、という言葉はおもしろい考えで、まったくその通りかもしれないと思った。

10 A.3 アレグザンダーのことは、記憶によって話したので、コリングウッドとアレグザンダーのテキストに基づいて、どう言っているのかを確かめる必要がありますね。そして、それを直接または間接に引用することで、レポートの書式の練習にもなります。

Q.4 ピュタゴラスのオリムピックを例に出した説明は独創的でおもしろいとおもいました。

15 A.4 この言葉が、どこまでピュタゴラスに由来するのかはともかく、哲学者とは何かを、消去法で浮かび上がらせる表現としてはよくできている例え話であると思います。

Q.5 電光という現象を説明する際に、アナクシマンドロスは「風による雲の破裂」と述べ、神の要素を説明から取り除いていますが、現代の観点からするとそれは間違いであるとわかってい  
20 ます。しかしながら当時の人々はアナクシマンドロスの説明を受け入れることができたのでしょうか。はたまた現象を説明するための実験が行われていたのでしょうか。アナクシマンドロスに限らず、当時の自然哲学の考え（おそらく現代と異なる）は受け入れられていたのでしょうか。

A.5 当時のアンケート結果があるわけではありませんから、どの説がどういう人口比で支持  
25 されていたのかはわかりません。しかし、相変わらず、「ゼウスの怒り」だと信じている人々、アナクシマンドロスに同調して「風による雲の破裂」と思う人々、それに、「風による雲の破裂」以外の別の説明の仕方を考える人々、と分かれていたのではないのでしょうか。これを確かめるための実験ができたわけでもありませんし。

Q.6 Xenophanes のように嫌なことを堂々と言う人には少し尊敬してしまうな、と思いました。

A.6 堂々と言いたいこと（言うべきこと）を言える立場にいるかどうかが問題なのでしょう。  
30 それを言えば、明らかに自分が不利になるのに（極端な場合は命を失う）、ここで言うことが（世のためか、人のためか、何か、自分のことよりも大切なもの・ことのために）必要だと判断して言う場合には、偉いと思います。

Q.7 今日から新たに Xenophanes, Heracleitos, Pythagoras が登場しましたが、Pythagoras まで  
早くまわらないかと楽しみでなりません。Pythagoras やその一派は数について考える際、自分た  
ちの倫理的・美的価値観を（後世の人より）強く出していたところがおもしろいと思います。

A.7 ピュタゴラス本人のことは、実は、よくわからないので、ピュタゴラス派について研究  
35 している人たちの研究成果に任せたいと思います。そういう研究のなかで、信頼できるのは、日本語でも読める、チェントローネの本です。

B. チェントローネ、2000、『ピュタゴラス派 その生と哲学』、斉藤憲訳、岩波書店。

## 西洋古代哲学史 第 10 回 (2018.05.17.)

Q.1 世のためか、人のためか、何か自分の大切なもの・ことのために～人間の行動において、下線以外のことが存在するか？

A.1 存在する。慧皎(えこう)の『高僧伝』巻第一 訳経篇上の漢の洛陽の安清の場合、「私にはまだ身につけるべき報いが残っている。今、会稽に出かけて報いにけりをつけなければならぬ」と言って、自分が死ぬとわかっていながら殺されに行く。「走れメロス」のメロスも同じような状況である。

この場合、「自分の大切なもの・こと」をどうとらえるか、短期的にみるか、長期的にみるか、それも、自分の一生のスパンでみるか、それどころか、数世代にわたって長期的にみるかによっても違うことを言えるでしょうが、慧皎やメロスの場合、慧皎やメロス個人に限って、短期的にみれば、自分の命よりも大切なもの・ことのために行動していると言えるでしょう。それは、この場合、世のため、人(=他人)のためであって、かつ、それは、「自分の大切なもの・こと」でもある、と言ってしまうと、それ以上の議論は必要なくなるのは、すべてを「(その人にとっての)みなし」であるという言い方と同類です。それは、議論の展開を妨げる怠惰な論法でもあると思います。

先に、「世のためか、人のためか、何か自分の大切なもの・ことのために」と書いたのは、(a)世のためか、(b)人のためか、(c)何か自分の大切なもの・ことのために、という(a)(b)(c)という排他的三分法を想定しているのです。さしあたって、(a)(b) = (c)という見方(これが上述の論法)をされると、議論の前提が異なるので、話がかみ合いません。

2018年度についていえば、赤井は広島大学だけで(他大学の授業は除く)、36コマ、某先生は21コマ、某先生は21コマの授業を担当していますが、21コマの某先生よりも、36コマの赤井のほうが給料が安く、それだけでなく、教免講習や公開講座も受け持つ赤井に対して、ドイツに行っていて日本にいないから、講習や講座を受け持たないという某先生は、「自分のこと(それは自分の研究でしょうか?)」が大切なのでしょう。赤井も、自分の研究時間を確保するためには、授業の受け持ちコマ数を減らし、講座も受け持たなければいけません。受講生が困るだろうと思って(制度的には、大学が学生に必要な授業を提供しない、という状況になる)、安い給料で講習や講座を受け持つのは、「何か自分の大切なもの・ことのために」受け持っていると言えるでしょうか。受け持つ当人の意識としては、むしろ、「世のためか、人のためか」に受け持つという感じです。講座や講習にとられる時間があれば、自分の研究ができるのですが、それを割いているわけですから。

それでも、通常の授業のコマ数にせよ、講習や講座にせよ、赤井には能力的にできないからとかなんとか理由をつけて断れば、受講するはずだった人たちが受講できない状況が生じ、大学当局から、「哲学」分野の担当教員に対して、責任をとるようという、圧力か、指導か、業務命令が下されるでしょう。そうなることを予め回避するために、講習や講座を受け持つのは、結局、「自分の大切なもの・こと」のためだと言うのでしょうか。

私は、むしろ、通常の授業のコマ数を減らし、講習や講座も受け持たず、大学当局から、「哲学」分野の担当教員に対して、責任をとるようという、圧力か、指導か、業務命令が下されたほうがよいのではないかと思います。その場合は、「哲学」分野の責任者に、より重い責任が問われるでしょうから。

Q.2 レポートの基となる翻訳を図書館で探そうと思うのですが、読み易い哲学の著作はありますか。

A.2 たとえ読み易くないとしても、訓練のためにそれに挑戦するのはどうですか。

Q.3 最近暑いですね。大学は高校と比べて自由なことが多いですが、エアコンの操作は鍵がないとできないというのが不思議です。自分たちで操作できると助かるのですが。

A.3 大学はケチなので、学生が自由に電力を使うことを許していないのですね。某T大の理系学部では、全ての部屋のエアコンを一括管理しているので、教室ごとに操作できないようになっ



ているという例もあります。「自由なこと」の内容・対象が問題です。

Q.4 色々な古代の哲学者について学んでいますが、実際に原典を読む演習をしてみたいと思いました。

A.4 とてもよいことです。ギリシア語を学んで、原典で読みましょう。(以前、学生が、「さあ、ここから、あなたのギリシア語ライフが始まる！ レッツ・リード・グreek！」みたいなことを言っていたのを思い出します)

Q.5 時代が進むにつれ具体的に語らないと人々に伝わらなくなってきたということですが、現代においてはどうだと思いますか？

A.5 今も、かわらないと思います。もうひとつ重要な観点は、どの範囲の人々にわかってもらうか、あるいは、そもそも、すべての人々によって同じ程度の理解されうるようなことなのか、という問題に対して、どういう態度・姿勢をとるか、ということがあります。

Q.6 神をより具体的に説明するため、ものとして扱うことは人間の間で考えられるかぎり持つしかない限界ではない(か?)と思いました。神についての説明は人間ではできないのでしょうか。

A.6 それを徹底しているのは、キリスト教の場合は、偽ディオニシウス・アレバギタの否定神学でしょう。神は「～ではない」という言い方でしか表現できない(のが人間の能力の限界)というわけです。

Q.7 神の姿は自然と人のような姿で想像してしまうけれど Xenophanes の考える神を聞いて、その時代の発言としては確かにレベルが高いと思い、驚きました。

A.7 かなり、ブツ飛んでいたと思いますから、周囲の人たちの多くからは理解されずに、苦労したのではないかと思います。しかし、逆に、安易にわかってくれる人が少なければ少ないほど、これは本物かもしれない、という予感もします。

Q.8 レポート課題についてなのですが、最終的に出すレポートは予備レポートに加筆修正したものを提出しても大丈夫ですか？ 最近レポート課題に向けて参考文献を集めているのですが、これらを1ヶ月以内に読んでまとめるのは厳しい貴がしてきました。

A.8 最終レポートは、予備レポートの修正版で結構です。「期限内に読めた範囲内でまとめる」という仕方で結構です。

予備レポートも、最終レポートも、学術的研究文献を書くための練習として課すものですし、しかも、予備レポートは、完成していなくてもよいので、芸術的な創作物の場合とは、事情が異なるのですが、ブルックナーという作曲家は、すでに完成した交響曲を後になって何度も、改訂版を作って手を加えて、本人としては、作品をよりよくしているつもりでようですが、実際に聴いてみると、初版のほうがよい、ということがあります(例えば、交響曲第1番ハ短調は、後のウィーン稿よりも、最初のリンツ稿のほうがよい)。実際、昨年度、私の別の授業で、或る学生が提出した予備レポートのほうが評価が高く、最終レポートは低い評価にせざるをえなかったということがあります。

## 西洋古代哲学史 第11回 (2018.05.22.)

Q.0 (講義とは全く関係ないのですが) 最近身体の疲れがとれないです。赤井先生は疲れがたまっているとき、どのように回復させますか?

A.0 十分に時間をとって寝ること。風呂に入ってから寝るのもよいと思います。

5 Q.1 ダイモンが何かはっきりわかりませんが、当時の方がダイモンをどのような存在としてとらえていたのか気になりました。

Q.1' 民衆にもダイモンは取り入れられたことはあるのでしょうか。またダイモンがそう言っているということにして、ダイモンの存在を悪用した人もいるのでしょうか。

A.1,1' ダイモンに関心があるのなら、日本語で読める本で、かつ、ギリシア語の原典にもとづいて考察しているという点で信頼できるものとして、以下の本を薦めます。

10

田中美知太郎, 1957 (再版あり), 『ソクラテス』, 岩波新書, 特に, pp. 79–120.

『田中美知太郎全集』の中にも、収録されていると思いますので、図書館で探してみてください。

15 Q.2 高校で世界史を習ったとき、古代ギリシアの哲学者を扱った際に、誰々は万物の根源は～、誰々は万物の根源は～と言っている、という流れの中で、ヘラクレイトスの「万物は流転する」という言葉が浮いているように見えました。しかし今日の授業では、ヘラクレイトスは火を万物の質料的始元であると言ったと出てきました。その直後に「万物は火から形成され、再び火へと解体してゆく」という言葉がありますが、ヘラクレイトスは万物の根源は火だと考え、その考えを発展させた結果、「万物は流転する」という思想に行き着いたのですか?

20 A.2 「火」が先か、「万物は流転する」が先かは、わかりません。ただ、ヘラクレイトスは、湿っている状態(水気のある状態)よりも、乾いている状態(その象徴が火)のようが望ましいと考えていた節があり、火を根源的であるとするのは、そのことと関係があると思います。しかし、現実には、湿っている状態があるので、湿っている状態と乾いている状態の関係をつけるのが、「万物は流転する」という発想だったということは言えるかもしれません。

25 Q.3 暗い語で有名であることは、暗い語の内容がすぐれているので、そう言うと思いますが、意味のはっきりしない語を理解してくれる人がいなかったら、単にわけのわからないものを書くものとして伝えられると思いました...

30 A.3 ヘラクレイトスの場合は、わざと、意図的に、わかりにくい(暗い)表現をして、それを理解できる人にだけわかってもらえばよい、と考えていたのでしょうか、やはり、世の中には、それを理解できる(あるいは、理解できると思う)人たちが少数でも存在して、ヘラクレイトスの言葉を、今に伝えてくれているでしょう。つまり、ヘラクレイトスの言葉を読んで、何を言っているのかわからん、と言って、投げ出してしまおう人たちと、ちょっと読んだだけではわからないけれども、よく考えてみると、何か意味の深いことを言っている、ということに気づいた人たちがいる、ということです。この後者の態度、つまり、何かわからないことに出会った場合に、すぐにあきらめないで、何か意味のあることを言っているとすれば、どういうことだろう、と考え、35 探究する態度は、哲学と哲学史を研究する上で、もっとも大切な態度です。

Q.4 予備レポート課題のA\_1(「問答と探究としての哲学史」—『西洋哲学史の再構築に向けて』)に取り組んでいます。恥ずかしい話ですが、まだ読んで理解に努めるのが精一杯で、批評に至りません。どこに注目し、どう批評すればいいのでしょうか?

40 前述の課題を読む上で、自分の持っている『広辞苑』と『ブリタニカ大百科事典』を参考にしているのですが、ブリタニカはレポート・論文等の参考にするのにふさわしいですか? ちなみにブリタニカは、始動因を動力因または作用因と書いていました。また、初心者におすすめの哲学事典(辞典)があったら教えて下さい。

A. 4 予備レポートについては、批評できなくても構いません。課題の論文を読んで、すぐには理解できなかった点を、他の文献、資料にあたって、自分で調べて、完全にはわからなくても、こういうことではないか、というところまでわかった、という報告文書で十分です。本当の意味で批評・批判するためには、論文の筆者と同じレベルで、アリストテレスのギリシア語を読み、アリストテレスについての研究文献（それは、英独仏伊語で書かれている）を読みこなせる人でないとできない話ですから。

個々の言葉の意味や、事柄の内容を確認するために、各種の『辞典』や『事典』を使って確認してもらって結構ですが、本来の研究（論文）は、それまでの研究成果として、一般に認められている事柄を記載している、各種の『辞典』や『事典』の記述を、訂正するほどのものですから、各種の『辞典』や『事典』の内容は、現時点での通説として使って下さい。それは、『哲学辞典・事典』でも同様です。また、「始動因」「動力因」「作用因」は、どれも間違いではありません。他に、「作出因」「起動因」というものもあります。『事典』のその項目の執筆者の解釈によるのでしょう。『辞典』や『事典』によっては、項目ごとに、執筆者名を記載しているものがありますから、引用するときは、事項名、ページ数だけでなく、執筆者名まで書けばよいでしょう。

同じ事項を、異なる『辞典』や『事典』で読み比べてみるのもよいかもしれません。図書館で探してみてください。

『哲学事典』、平凡社。

『岩波 哲学・思想事典』、岩波書店。

『哲学・論理用語辞典』、思想の科学研究会編、三一書房。（これの初版と第2版までがよい）

*Philosophisches Wörterbuch*, H. Schmidt, hrsg. von G. Schischkoff, Kröner.

*Encyclopédie de la philosophie*, La Pochothèque, Garzanti.

『辞典』『事典』の類ではなくて、哲学史の本の索引を使って、関係する記述を読むのもよいと思います。しかし、一番よいのは、当該の原典（の日本語訳）を読んでみることです。

Q. 5 先生によって担当するコマ数が15も違うというのは、それいいのだろうかと思いました。たくさんの授業を開講してもらっている分こちらもがんばろうと思います。

A. 5 まあ、先生の都合には関係なく、学生諸君としては、各自にとって必要だと思われる授業に出て、学んでもらえばそれでよろしいですから、せいぜい、自分の勉強のために、授業を利用して下さい。

どうやら、授業をやれと言われても、やらない（やれない）先生と、言われたらやれちゃう先生の違いのようで、やれちゃう先生は、やらない先生に使われている、いや、使い捨てにされている、という感じがします。というのも、分野ごとに、開講することを学生に約束している授業科目の種類と数が決まっていますから、誰かが授業をしなければならないことになっています。それで、以前、他の先生に、哲学をやっているのなら、西洋古典語（ギリシア語とラテン語）それに、論理学は、先生なら誰でも、学部レベルの授業ならできるはずだし、また、できなければならないから、毎年ではなくても、年度によって交代してやってくれないか、と話したことがあります。そんなことをやる時間があつたら、自分の勉強をする、と言って断られました。でも、そうやって、自分の勉強（と自分で思っている勉強）ばかりしている結果が、以前、別の授業で紹介したような、重訳による「全く規定された、確固たる根本姿勢」（本来は「ヘクシス」とか「習得態」と訳されているし、そう訳さないと、哲学的には通じない）という訳であつたり、ドイツ語の誤訳であつたりするので、やはり、そうならないためには、西洋古典語（ギリシア語とラテン語）や論理学をやったほうがよいと思うのですが、もう先生たちのような年齢になってしまつては、それこそ、「全く規定された、確固たる根本姿勢」が固まってしまうので、できないのしょうね。（笑）

## 西洋古代哲学史 第12回 (2018.05.24.)

Q.1 ヘラクレイトスの考えの根幹は東洋的であるような印象を受けました。彼の言葉は詩的で、つかみどころのないような感じでわかりづらいのですが、言っていることは全体を通じて筋が通っていてシンプルであるようにも見えます。ニーチェは彼の影響を強く受けたようですが、Fr. 101「私は自分自身を探究した」という言葉から、後の実存主義の先駆けなんじゃないかなと感じました。

Q.1' 万物の生成の問題など、外界をテーマにした研究をする人たちが多い時代に、ヘラクレイトスは自己についても探究したというのは新しい時代を切り拓くことだったと思う。

A.1,1' おっしゃる通りで、うまくまとまりすぎていて心配なくらいです。「東洋的」をどう捉えるか次第ですし、逆に、そういう言い方をするならば、ヴァイシェシカなんかは、西洋的です。実存主義（キェルケゴール、ニーチェ、サルトル、ヤスパース、ハイデッガーも）は、哲学者ごとによってまったく違うところのほうが大きいと思いますが、私なんかは、「自分自身を探究」というところから、アウグスティヌスやヒルデガルト・フォン・ビンゲンを思い浮かべます。

Q.2 火、水、土などを聞いて、中国の陰陽五行説を思い出しました。火や水といった要素が世界を構成する基になっていると西洋に限らずに考えられていたようですが、当時の人々はそれらの要素は大きな存在だったのでしょか。

A.2 当時の人々に尋ねて下さい、と言いたいところですが（もう言ってますが）、尋ねる方法としては、哲学以外の文献も含めて、当時書かれて残っている文献にどう扱われているかを調べるしかないですね。しかし、少なくとも、哲学関係の文献では、四大（火、水、土、アエール）は、肯定されるにせよ、否定されるにせよ、何らかの意味のあるものとして扱われています。

Q.3 私は今まで相対立するものが対立そのものによって調和しているといった考え方がなかったもので、変化しているから止まっているというヘラクレイトスの考え方がおもしろいなと思いました。

A.3 押し合う力、あるいは、引っ張り合う力が釣り合っているので、静止している、ということをして、世界のあり方を説明しようとしているのでしょうか。物理的・力学的状態だけでなく、例えば、実際に戦闘状態にはないけれども、二つの国が、同じ兵力をもってらみあっている状態も同じように考えられます。

Q.4 ログスから何も返事がない人は哲学するにふさわしくない人でしょうか。哲学者についての研究ばかりで、自分ではさとしていない哲学する人もあるのかなと思いました。

A.4 「哲学者についての研究」は、哲学史の仕事として、誰かが（哲学史家）がやらなければならない仕事でしょう。以前、私の先生が「哲学史家にもなれないようなやつが哲学をしようとするから話がややこしくなる」と意味のことを言っておられました。プラトンは、もって生まれた資質と、その資質をしかるべく訓練する必要があるという立場で、その条件を満たしていない者が哲学をしている現状が、古代からあったようで、次のように『国家』の中で述べられています。

Τὸ γοῦν νῦν ἀμάρτημα, ἦν δ' ἐγώ, καὶ ἡ ἀτιμία φιλοσοφία διὰ ταῦτα προσπέπτωκεν, ὃ καὶ πρότερον εἶπομεν, ὅτι οὐ κατ' ἀξίαν αὐτῆς ἀπτονται· οὐ γὰρ νόθους ἔδει ἀπτεσθαι, ἀλλὰ γνησίουσ. [Plato, *Respublica*, VII, 535C5-8]

「少なくとも、現在行なわれている間違いと、哲学にふりかかっている軽蔑とは、こうしたところから起こっているのだからね」とぼくは言った、「つまり、前にも言ったように、その資格もないような人々が哲学に手をつけているからなのだ。というのは、生まれのいかがわしい者たちがこれに手をつけてはならなかったのであって、正しい生まれの者たちにだけそれが許されるはずだったのだから」（藤澤令夫訳）

ヘラクレイトスのログスから、少し逸れてしまいました。哲学の場合は、「哲学（自分の頭で考える）」と「哲学史（他の哲学者が何を問題にしているかを正確に理解する）」が、哲学以外の

学問分野の場合よりも、分業がむつかしいと思います。というのは、大抵の人が「哲学（自分の頭で考える）」だけをすると、（本人にとってはすごいと思われても）「哲学史（他の哲学者が何を問題にしているかを正確に理解する）」的にみると、すでに言われていることを、しかも、より程度の低い不十分な仕方と言っているにすぎないことがほとんどだからです。だから、「哲学（自分の頭で考える）」しても無駄だとは言いません。むしろ、それでも、各人は「哲学（自分の頭で考える）」すべきだし、しなくてはなりません。ただし、自分の「哲学」が、「哲学史」的には、どの程度のものに過ぎないのかを自覚していなければ、学問としての哲学ではありません。ですから、「哲学史」の現況が必要なのです。ヘラクレイトスのロゴスにたずねて、何かがわかる、という人は、「哲学（自分の頭で考える）」する能力・資質・才能があるということでしょうね。

「哲学（自分の頭で考える）」することが必要である、ということについては、カンギレムの弟子でもある、科学哲学・科学思想史のルクールが、カンギレムの考え方として、次のようなことを紹介しています。

「大学入学資格試験の小論文に真に適う哲学の課題」というのは、学説を対象とするのではなく、問題を対象にせねばならない。それというのも、そもそも哲学とは「解決からできているのではなく、問題からできている奇妙なもの」だからだ。例をあげてみよう。「判断における意志の役割とは何か」（クレルモン、1929年10月）、「情動とは何か」（ディジョン、1929年10月）。[ドミニック・ルクール、2011、『カンギレム—生を問う哲学者の全貌』、沢崎他訳、文庫クセジュ、白水社、p. 102.]

ここで、「大学入学資格試験」というのは、リセ（高校）の卒業試験、いわゆる、バカロレアが、すなわち、大学入学資格試験、ということでしょう。

Q.5 お酒を飲んだことがないので、酔って魂が湿るという感覚はよくわかりませんが、比喩表現としてはおもしろいと思いました。

A.5 お酒（といっても、ワインでしょうが）を飲むと、魂が本来の火の状態・乾燥した状態から、逆の状態になるというのですが、自分の場合は、カッカツとしてきて（乾いた感じ）、水を飲みたくなります。その結果、水を飲むので、確かに、水分を多く摂取するのですが、それは、お酒がきっかけではあっても、直接の原因は、水そのものです。ヘラクレイトスの言うことは、例えば、何らかのイメージなのでしょうが、実感はありません。

Q.6 ヘラクレイトスが湿っているより乾いているのをよしとしたのは、湿っているとカビが生えたり虫がわいたりするし、伝染病の原因になったりするからかなと思いましたが、地中海性気候では日本と比べて深刻な湿気があった気がしません。そんなに即物的でない意味がありそうです。

A.6 ヘラクレイトスの場合は、火（乾燥）との対比で水（湿り気）が考えられていると思います。つまり、本来、火的存在である、魂は、湿ったものによって液化することが、すなわち、魂の死である、というイメージです。ただ、地中海性気候といっても、イオニア（小アジア）の陸地では、靄（もや）、霧（きり）、霞（かすみ）を観察することによって、件の四大（火、水、土、アエール）が考えられたので、アエールは、通常、「空気」と訳されますが、実は、湿り気のある、靄（もや）、霧（きり）、霞（かすみ）も指していると考えられます。単なる「空気」や「大気」ではなかったと思われます。さらに、ギリシア本土の、そして、島々の、白いむき出しの岩肌ばかりの、乾いた印象を与える情景は、ローマ時代以降のもので、この時代には、まだ、樹木の生い茂る土地であったと考えられます。というのも、軍船を建造するために、植林をしないで（自然環境の破壊などという発想がなかった）、片っ端から、樹木を切り倒した結果、ローマ時代には、現在のような、樹木のない、岩肌だけの風景になってしまったからです。ヘラクレイトスが見ていた風景と、今、私たちが見る風景は違うということです。

## 西洋古代哲学史 第13回 (2018.05.29.)

Q.1 ラニョーやアランのように、高校の教師でありながら哲学の研究者として第一線で活躍した人は他にもいるのでしょうか。

A.1 ジュール・ラシュリエやシモーヌ・ヴェイユなど、調べれば他にもいると思いますが、「第一線で活躍した」と言っても、彼らは、生前、高校（リセ）の教師として、また、反戦運動をしたりしていたのであって、アラン（本名は、エミール・シャルティエ）のように、執筆活動をしている人もいますが、没後、彼らに教えを受けた弟子たちが、講義ノートなどを編纂して出版し、授業を受けたことのない人たちにも知られるようになったというパターンです。従って、生前、「第一線で活躍した」という印象はありません。死後、注目されるようになった、というのが実際のところでしょう。ただし、カンギレムのように、リセの教師をしていて、その間も執筆活動をしていて、その後、大学の教師になった人たちもいるので、みんながみんなそうというわけでもありません。たぶん、「高校の教師でありながら」というところに、ひっかかりがあるのですが、ドイツのギムナジウムの教師によるアビトゥアも、フランスのリセの教師によるバカロレアも、いずれも、（高校の卒業試験であるよりも）大学入学資格を与えるもので、大学には入学試験がない、というところが、日本と違うところです。フランスやドイツでは、高校の教師が大学に入る資格を生徒に与え、彼らを学生にする権限をもっているのです。日本の高校の先生とは違うのです。そうすると、「高校の教師でありながら」は、「高校の教師であるからこそ」になるかもしれませんね。

Q.2 哲学の研究において、必要な哲学者とそうではない哲学者があると思いますが、自分の研究で必要ではない哲学者がいるということは、自分の研究が・・・

A.2 「必要」ということの意味によると思います。自分が問題関心をもっている哲学の領域とは、関係のない（と思われる）ことを論じている哲学者の著作は、敬遠して読まない、ということ（これが、必要でない、ということのひとつの例）があるかと思いますが、そのときには、そう思われても、後で読むべきだった、ということがわかることがあります。しかし、どの哲学者もそうだというわけではなくて、読まなくてよかった、という場合もあります...

Q.3 ピュタゴラス派は自信の思想に数学的な面と宗教的な面を持っているとのことですが、理性的要素の数学と信仰的要素の宗教を結び付けることができるのか気がかりになりました。当時は既に信仰、理性の調和についての考えがあったのか気になりました。

A.3 「数学的な面」と「宗教的な面」をもつというのが、既に、現代の見方なので、ピュタゴラス派は、数学的とか神秘的とか分けて考えていなかったのではないのでしょうか。それに、「数学的な面」と言っても、（アリストテレスの四原因の見方からすると）ピュタゴラス派にとっては「数」がこの世界の構成要素なのであって、すべてが「数」からできていると主張するなんて、それだけでもう十分に神秘的ではないのでしょうか。

Q.4 ピュタゴラスの話聞いて、何も書き残さなかった哲学者や、講義が終わると資料を捨てる哲学者がいたという話を思い出しました。

A.4 講義は、ライヴと同じで、そのときだけの勝負だと思えば、「講義が終わると資料を捨てる」というのもわからないではありませんが、それは、積み重ねや継続が必要な研究とは別のことだという理解でよいのでしょうか。

Q.5 人を排除する際に、一番初めにやるのがその人のお墓を作るというのは何と陰湿な行動だなと思いました。

A.5 遠回しに、その人がその組織にとってはいなくなったことを周知する、という意味で、陰湿ですね。しかし、逆に、あけすけに、（私が着任したとき）「ここは、ああ～たのような、どこの馬の骨かわからないような人のくるところではない！」と、ある先生から直接言われるのも、どうかと思います。

Q.6 F.115「魂には自己を増大させるロゴスがそなわっている」とありました。自己を増大させた結果、宇宙の大きさにまで至ることで理論上(?)測定可能になるんじゃないかな、とバカ

なことを想像しました。この際の宇宙は無限の比喩として使われているのですか。

- A. 6 ヘラクレイトスの場合、宇宙の大きさについてはわかりませんし、無限かどうか不明だと思えます。F. 115 の「魂には自己を増大させる～」も、「無限に」とは言われていません。授業では、Fr. 115 の前に引用している、Fr. 45 によると、魂とロゴスの関係も簡単ではなくて、魂は、自己の奥へ奥へと深く踏み込むイメージです。

君は道行くことによっては、ついに魂の終端を見出すことはできないだろう。いかに君があらゆる道にそって旅をしようとも、それはそれほど深いロゴスをもっているのだ。(Heraclitus, F. 45)

- 「道」というのは、おそらく、既存の方法のことで(たぶん、博識)、そうではなくて、本当の知恵によるのが、ロゴスに従うことなのでしょう。そして、終端を見出すことはできないが(これが直ちに、無限ということではない)、魂が自己の奥へ奥へと深く踏み込むことが、同時に、宇宙の魂として、増大することにつながる、というパラドクシカルな言い方になっているのです。

Q. 7 転生した後に、別の肉体へ魂が移り宿るとするのは、宗教の思想的に、動物以外でもありえたのかなと気になりました。

- A. 7 「動物以外」というと、植物とか、無生物の石とかでしょうか。人間を含む動物までの範囲でなら、以前も紹介した、プラトンの『国家』の最後にある、いわゆる「エルのミュートス」(Plato, *Respublica*, X, 13–16, 614A–621D)を読むとよいと思えます(というか、読め!).

プラトン、『国家』(下)、藤澤令夫訳、岩波文庫、pp. 354–373.

- また、今学期は詳しく扱えませんが、エンペドクレスの場合は、植物にも転生するようです。エンペドクレスの『カタルモイ(浄め)』という著作の断片に次のようなものがあります。

なぜなら、私はこれまですでに少年であり、少女であり、  
灌木であり、鳥であり、海に跳躍る物言わぬ魚であったのだから。(Empedocles, Fr. 117)

また、クセノパネスが伝える、ピュタゴラスの逸話として、次のようなものがあります。

- あるとき、彼(=ピュタゴラス)は小犬が打ち叩かれているところを通りかかり、  
不憫に思い、こう言ったと伝えられている。

「やめよ、叩いてはならぬ、これは私の友人の魂だからだ。

その鳴く声を聞いてそれとわかったのだ。」(Xenophanes, Fr. 7)

Q. 8 赤井先生も音楽をされているそうですが、魂の浄めのためですか？

A. 8 そう思ったことはありませんが、結果としてそうなっているのかもしれない。

- Q. 9 (今日扱った内容ではありませんが、目にとまったので書いておきます) ミハエル・エンデの「モモ」(ママ、『モモ』?)の中に、主人公のモモが夜寝る前に星々の奏でる音楽に耳をすます、というシーンがありました。ピュタゴラス派の天体音楽説にそっくりですね。

A. 9 現代でも、星座(星の位置)を描いた平面上に、五線をあてはめて採譜し(音程とリズムを決める)、それをもとに曲を作って天体の音楽と称している音楽家がいるようです。

## 西洋古代哲学史 第14回 (2018.05.31.)

Q.1 自分はプリントの処理が下手で、よくプリントをなくすのですが、何か良い解決法をしないですか。

A.1 専用のファイルを用意して綴じる。また、スキャンして、pdf化し、電子ファイルとして保管する。書類の分類・管理の得意な秘書、恋人、友達などに任せる... プリント管理を業務とする専門の人を雇う...

Q.2 赤井先生も何か ○○学派といったものに属しているのですか。

A.2 自分では属している意識はありませんが、他人がどう見ているかは別です。お笑い学派とか。

Q.3 授業と合わせて雨が降りましたが、その音が大きかったので音楽みたいな授業だったなと感じました。

A.3 雨の中、古代哲学史のライブを聴きにきてくれてうれしく思います。今日も、ライブに来てくれてありがとう！

Q.4 「何をなすべきか、なすべきでないか」について、(10)そら豆を食べてはいけない、とあるが、何故これが禁止事項になっているのかが不思議に思いました。

A.4 古来、何故かは謎で、諸説があります。アリストクセノスの証言では、食べてはいけないのは、耕作用の雄牛だけで、別に、そら豆を食べてはいけない、ということにはなっておらず、逆に、そら豆はお通じをよくするので、ピュタゴラスが大いに好んだ野菜である、ということになっています。

他方、ポルピュリオスによれば、ピュタゴラスは、そら豆を食することを人肉を食することになぞらえて忌避したことになっています。それは、生命の発生過程において、人間もそら豆も同じ腐敗から生じたからだというのです。ポルピュリオスによると、そら豆を割いて歯と一緒に太陽にあてておくと、人間の精液のにおい、別の伝承では、血のにおいがする、あるいは、花のついたそら豆を容器に入れて地中に埋めておくと、90日後に赤ん坊の頭、あるいは女性の性器が見出される、とか、あるいは、そら豆を通して、死者の魂が地上に戻って来るとか、いろいろなことが言われています。このあたりのことは、以前紹介した、B. チェントローネ、2000 (原著は、1996)、『ピュタゴラスとその生と哲学』、齊藤憲訳、岩波書店、の p. 107 以降の「食物の禁忌」に紹介があります。

西洋古代哲学史としては、いろいろな説が言われていて、ピュタゴラスがどういつていたのかはわからない、とうことをおさえておけばよいのであって、人類学だか社会学だか、宗教学史だかをやるつもりでないと、いちいちつきあってられません。

Q.5 ピュタゴラス派が数を質料と捉える一方で、アリストテレスの考え方では数は形相として捉えることができる。私自身は後者の考え方をしています。このように知らず知らずの内に人によって考え方が固まってきているのが少し嫌だなと思いました。

A.5 そのアリストテレス自身は、ピュタゴラス派の「数」を形相ではなくて、世界の構成要素としての「質料」として捉えていたことは、注目に値します。

Q.6 宗教について知るのはおもしろいですが、現代の宗教を思い出すとやはり怖いというイメージも持ってしまいます。

A.6 研究対象として、突き放して宗教を扱うことができなくてはならないでしょう。

Q.7 ピュタゴラスの話は面白いのですが、宗教的な部分はなんとなく危険な感じがします。ただ弟子たちが後に宗教的な面を切り離してしまったということなので、ピュタゴラス本人はそんなにあぶない人間ではなかったのかもしれないなと思いました。

A.7 なにしろ、ピュタゴラス本人のことはわからないので、なんとも言えないと思います。



Q. 8 「やめよ、叩いてはならぬ、これは私の友人の魂だからだ、その鳴く声を聞いてわかったのだ」と言いつつ、犬をかばったというピュタゴラスの逸話は好きです。現代でそういうことをするなら、不思議ちゃんか、あるいは不審者扱いされるかもしれませんが、肉体が死んだ後に別の肉体（動物も含む）に魂が移るという考えは古代ギリシアでは、知識人以外の人々にもある程度理解されていた考えなのですか？

A. 8 それを調べるには、「知識人以外の人々」が書いた著作（そんなものがあれば、知識人ということになるか）か、彼らがどう考えていたかを報告する文献があればわかりますが、それはすぐにはわかりません。しかし、むしろ逆に、「知識人以外の人々」が信じていたことを、知識人が著作に書き残している、とは考えられませんか。現在の私たちが哲学以外の分野の文献（つまり、歴史や文学）とみなしている文献を読まなければなりません。魂は肉体が死ぬと離れて、また、別の肉体に宿って生まれて来てしまう、というのは、一般的にそう思われていたようです。何に生まれ変わるかは、諸説あるようですが。例えば、ソポクレスの『コロノスのオイディプス』のコロス（合唱）1211行以下に、以下のような一節がありますが、

この世に生を享けないのが、おお人間よ、  
すべてにまして、いちばんよいこと、  
だが生まれたからには、来たところへ  
速やかに帰っていくのが次にいちばんよいことだと思え。

というのを、聴衆は聴いてなるほど、そうだなあ、と思っていたのではないですか。原典（つまり、ギリシア語の文献）にあたって自分で調べると、そうとう長生きしても調べられませんから、すでにある程度、そういうことを調べた先行研究を繙くのが、大体的見当をつけるのにはよいでしょう。例えば、ヤーコプ・ブルクハルトの『ギリシア文化史 (*Griechische Kulturgeschichte*)』というのが日本語訳で読めます。といっても、1冊あたり500～600ページの文庫本で8巻ありますが...ただ、これは、有名な『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)とは違って、1872から14年間におよぶ、バーゼル大学での講義をもとに、没後、出版されたものなので、評価はいろいろあると思います。

広範囲にわたってギリシア語の文献を渉猟し、ギリシア人が魂の転生をどう捉えていたかを研究したものとして、ニーチェの親友だった、エルヴィン・ローデの次の書（『プシューケー』）は有名ですが、もっと読まれてよいと思います（古いからこそ、最近のちゃちな研究書と違って信頼でき、読み応えがあります）。

Rohde, E., 1898, *Psyche, Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen*, Freiburg I. B., Leipzig und Tübingen. (1925, Tübingen; 1961, Darmstadt; 再版では、副題中の *Seelencult* が、*Seelencult* にされたりしている)

## 西洋古代哲学史 第 15 回 (2018.06.05.)

Q.1 何ものでもないというのは、思ったよりも説明が難しそうだと、メリッソスの文章を見て思いました。

A.1 確かに、何かであることよりも、何でもないことの言語表現のほうが、普通でないので、  
5 難しくなりますね。

Q.2 お笑い学派ってめちゃくちゃおもしろいと思いました。

自分では〇〇学派だ！ と思っていても周りからは〇〇学派のはしくれにもおかれず、お笑い学派に思われたり、その逆もあつたりするだろうと思いました。

A.2 お笑い学派をどう定義するかは、ちょっと、難しいですが、キュニコス（犬儒学派）  
10 に近いところがあるかもしれません。シノペのディオゲネス（樽に入っていた）とか。

Q.3 先生が紹介してくださった本、自分がいいなと思った本をどんどん読んでいきたいと思  
います。

中世哲学史の授業でもよろしくお願いします。

A.3 手に入るものは（買うにせよ、借りるにせよ）、なんでも読んで下さい。中世哲学の専門  
15 家による講義を諸君に提供できないことを申し訳なく思います。

Q.4 最後のライブ、お疲れさまでした。ソフィストの話にまでいかなかったことが残念です。  
批判されるものとしてのイメージのソフィストなので、すこしたのしみでした。

A.4 4タームに開講予定の「西洋古代中世哲学研究」（水9・10、金1・2）では、W. Jaeger の  
20 *Paideia* という書物のソフィストについての箇所を読みます。ソフィストを単に批判するのではな  
くて、ルネサンス期のフマニズム（人文主義）の淵源としてのソフィストの活動を積極的に評価  
して、現代にもつながっているという立場で研究をしています。

Q.5 ソフィストたちの話も聞いてみたかったので、来年、時間が合えばまた授業を聴きに来  
たいです。

A.5 単位とは関係なく聴講するのは歓迎します（とおおびらに言うと、大学当局からしから  
25 れるかもしれませんが）。当時のアテナイの人々にとっては、ソクラテスもソフィストの一人（た  
だし、授業料をとらないので、変なやつと思われていたでしょう）と思われていたでしょうけ  
れども、ソフィストについては、A.4にも書きましたが、4タームに開講予定の「西洋古代中世  
哲学研究」でも扱います。

Q.6 最近、プラトンの『テアイテトス』を読み始めたのですが、ソクラテスの問答に対する  
30 テアイテトスの返事が、肯定の内容にかかわらず、「いいえ、～。」と返すことが多く、たまに混  
乱することがあります。これはギリシア語の文法的な特徴なのですか？

A.6 まず、できるだけ早いうちに、ギリシア語とラテン語を学べ！ そうしないと、たとえ、  
近現代哲学を専門とするとしても、哲学の素人で終わってしまうぞ！ と言っておきましょう。英  
語とドイツ語しか知らない哲学の素人になってしまうのではないかと心配です。

さて、質問の件ですが、誰の翻訳で読んでいるのか書かれていないので、なんとも言えませ  
35 んが、田中美知太郎先生の訳では、「いいえ、～ではありません」と「いいえ」の結びは「～ない」  
と否定になっていることが多いと思うので、特に違和感はありません。

例えば、*Theaetetus*, 150B5 のテアイテトスの答は、

「いいえ、そう思います」

40 と「いいえ」の結びが、肯定になっていますが、その前のソクラテスの問いは、

「～君はそう思わんかね」

と否定疑問になっているので、ヨーロッパの言葉と違って、日本語では、まず、「思わないか」  
という否定形を否定するために、「いいえ」と言ってから、「否定」の「否定」である肯定形で「そ

う思います」と続けているので、日本語としてはこれで正しいのです。

ちなみに、この箇所 of 英訳 (M. J. Levett) では、問いの末尾と答は、

～ don't you agree?

Yes, I do.

5 となっていて、これで正しく訳されています。

この箇所のテアイテトスの台詞は、ギリシア語では、一言、

Ἐγώ γε

で、一人称人称代名詞「私は (～する)」を強調した形です。「少なくとも私は～です／する」という強調した表現です。ですから、訳文の「いいえ」に直接相当する語はありません。しかし、日  
10 本語としては、まず「いいえ」と言ったほうが自然なのでこう訳されているのでしょう。

質問者が言っているのは、別の箇所かもしれませんが、そのそれぞれについて、直前の問い  
がどういう形になっているかと、答が、そもそも、Yes / No の形で答えているかを調べてみなければ  
わかりませんね。

15 Q. 7 名古屋大学は、先生も学生も互いに「さん」付けで名前を呼び合うという、うわさを耳にしたのですが、先生の学生時代もそうだったのですか？

A. 7 ひょっとして、それは、名古屋大学理学部の文化というか、風習というか、そういうもの  
ではないでしょうか。それも、物理学教室には、坂田昌一以来の伝統があるので、何かそういう  
気風があるのかもしれませんが（確か、平和憲章とかを作っていますよね）。文学部では、組織と  
してはそういうことはありませんでした。ただ、もう退職されていますが、私が学部生だった頃、  
20 一番若い助教授だった、デカルトがご専門の山田弘明先生が、私たち学生に対して、教官（当時、  
今は教員）と学生（学部生＋院生）は、（給料をもらっているか授業料を払っているかという違い  
はあっても）哲学を学んでいるという点では違いはなく、先生の方が、先に学び始めたという違い  
しかないから、一緒に学んでいきましょう、という意味のことを学部3年の私たちにおっしゃっ  
て、ちょっと嬉しかったことを思い出します。しかし、学年が進むにつれて、先に学び始めた人  
25 の差がいかにか大きいかを痛感することになるので、先生は、私たちをおだてるつもりで言われた  
のかなと思います。だから、少しでも早いうちに、せっかく開講されている授業を勉強する機会  
として利用して、論理学、それから、ギリシア語、ラテン語、フランス語の文法を一通り学ぶと  
ともに、初級文法が終わったら、実際のテキスト（原典）を読む訓練を在学中に受けておくこと  
が必要です。そうしないと、どういうことになるかは、そういうなれの果てを見れば明らかです。

30 Ich sehe durchaus nicht ab, wie Einer es wieder gut machen kann, der versäumt hat, zur rechten  
Zeit in eine gute Schule zu gehen. Ein solcher kennt sich nicht; er geht durchs Leben, ohne gehen  
gelernt zu haben; der schlaffe Muskel verräth<sup>2</sup> sich bei jedem Schritt noch. [Nietzsche, *Der Wille  
zur Macht*, Kröner, 912; Schlechta, III, S. 722; KSA 13, S. 346.]

私は、適当な時期にすぐれた鍛錬を怠った者が、ふたたびそのつぐないをしようとは、けっ  
35 して考えない。そうした者は、おのれを知ることなく、歩行を習得しておかないままで生涯  
を歩みたどるのである。その弛緩した筋肉が一步をあゆむことにやはりこのことをうかがい  
しらせる。(原佑訳)

<sup>2</sup>=verrät. ニーチェ当時の綴り。